

米子水鳥公園における3年連続で 番い相手が変わったコハクチョウの記録

桐原佳介

(財) 中海水鳥国際交流基金財団, 683-0855 米子市彦名新田665

1. はじめに

コハクチョウ *Cygnus columbianus jankowskyi* は、一度番いを形成すると、一生涯添い遂げるといわれている(Ma & Cai 1993, 日本野鳥の会 1988)。ところが筆者は、米子水鳥公園で継続観察している105Yの標識を付けたコハクチョウ(図1)が、3年連続で番い相手を変えていることを観察によって確認した。大変興味深い観察例と思われるので、ここに報告する。

2. 105Yの番い形成を確認

米子水鳥公園(管理者: 財団法人中海水鳥国際交流基金財団)は、財団法人山階鳥類研究所と共同で、1997年3月に7羽のコハクチョウに緑色のプラスチック製首輪標識と足環標識(首輪、足環ともに104Y、105Y、106Y、108Y、111Y、113Y、114Y)、



Keisuke KIRIHARA. The record of tundra swans which changed breeding partner for three successive years in the Yonago Waterbirds Sanctuary

金属製の足環標識を装着した (Kamiya and Ozaki 2002, (財)中海水鳥国際交流基金財団 1998)。その後、「105Y」の首輪標識を付けたコハクチョウだけが、2003年の冬まで毎年米子水鳥公園に飛来している。なお、この個体は、標識装着時に雌の成鳥であることが確認されている。

標識された後の105Yは、2000年までは単独で行動していた。ところが、2001年冬に米子水鳥公園に飛来した105Yは、常に特定の個体と行動を共にしていることが、嘴の模様(ビルパターン)の観察によって確認できた。このとき、105Yと常に行動を共にしている個体を番い相手の雄とみなし、写真撮影して記録した(図2)。このように、コハクチョウは、各個体の嘴の模様を記録して比較する事で、ある程度までの個体識別が可能である(日本野鳥の会編集室 1988、樋口ら 1996)。

その翌年の2002年も、105Yが特定の個体と行動を共にしているのが確認でき、昨年と同様に写真撮影した(図3)。後に、撮影した写真をよく確認してみたところ、前年に同行していた個体と嘴の模様が異なることに気づいた。

さらに、2003年に飛来した105Yは、成鳥1羽と幼鳥もう1羽の3羽家族で行動していた。このとき、番い相手の嘴の模様に注目したところ、またも前年に確認された番い相手と異なっていることが確認でき、写真撮影によって記録した(図4)。

このようにして、2001年に初めて番い形成が確認された105Yは、2002年、2003年にそれぞれ別個体の雄と番いを形成していたことが、写真および観察によって確認できた。

3. 105Yの番い相手のビルパターンの検証

撮影に成功した写真だけではビルパターンの比較に不便なので、撮影できた写真



図2. 2001年に105Yと番いを形成した個体.

を観察したり、実際に望遠鏡で観察したりして、105Yの番い相手のビルパターンをスケッチした(図5～7)。なお、このスケッチは、「子ども渡り鳥ネットワーク」のホームページから白図を印刷し、それをもとにスケッチしたものである(引用元：<http://www10.plala.or.jp/naru0814/wataridori/kosekibo.htm>)。

2002年に確認した番い相手は、前年の個体とビルパターンが異なることに気づいた時にはもう姿を消していたので、わずかに撮影できた写真からのみビルパターンを分析せざるをえなかったが、右側面からのビルパターンで、鼻孔後方の黒と黄色の模様の輪郭の形状が異なることから、明らかに2001年の個体とは異なることが分かる。さらに、2003年の番い相手は、嘴の上面の黒色部が額にまで達しており、その途中に特徴的な黄色斑が2個並んでいることから、2001年、2002年のいずれの番い相手とも異なることが分かる。



図3. 2002年に105Yと番いを形成した個体.



図4. 2003年に105Yと番いを形成した個体(右)とその幼鳥(中央).

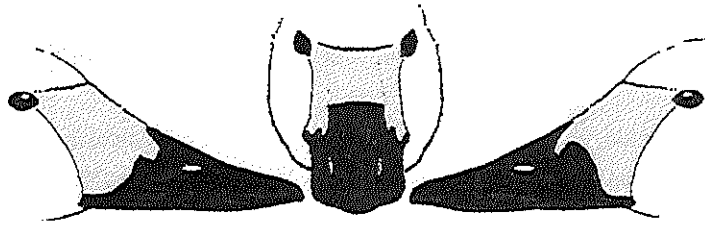


図5. 2001年に105Yと番いを形成した個体のビルパターン.

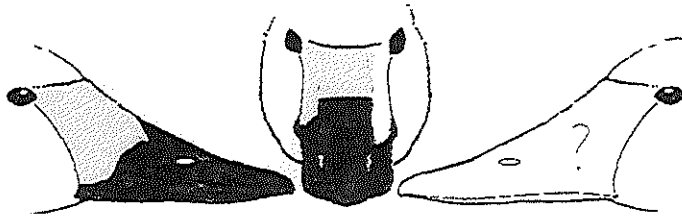


図6. 2002年に105Yと番いを形成した個体のビルパターン.

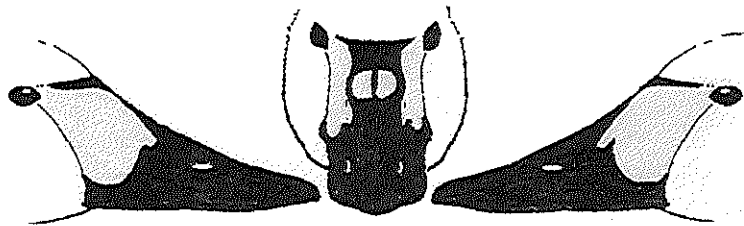


図7. 2003年に105Yと番いを形成した個体のビルパターン.

4. おわりに

105Yの標識をつけたコハクチョウは、標識後毎年欠かさず米子水鳥公園に飛来して越冬している、大変興味深い個体である。今後もこの個体に注目し、番い相手の動向を確認するつもりである。

この度の観察報告に当たり、ハクチョウの顔の白図を提供して頂いた、宮城県教育センターの成瀬啓氏と、助言を頂いた(財)中海水鳥国際交流基金財団の神谷要氏に厚く御礼申し上げる。

5. 引用文献

日本野鳥の会編集室. 1988. 個体識別によりコハクチョウの越冬群を調べる. 野鳥(508): 18-21.

- 中海水鳥国際交流基金財団. 1988. 平成8・9年度米子水鳥公園アルゴシステム
運営受託業務(コハクチョウ調査)報告書. 山階鳥類研究所, 我孫子.
- Ma Ming and Cai Dai. 1993. Wild Swans. Chinese meteorological Press, Beijing.
- 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲(編). 1996. 日本動物大百科3, 鳥類I. 平凡社, 東京.
- Kaname, K. and Ozaki, K. 2002. Satellite tracking of Beewick's swan migration from
Lake Nakaumi, Japan. Waterbirds 25 (Special Publication 1): 128-131.